



第 17 巻の刊行にあたって

東京大学法科大学院ローレビューの意義は、2006年に電子ジャーナル方式で刊行された第1巻の「創刊の辞」の冒頭で、当時の高橋宏志研究科長が謳い、15年余の間、歴代の研究科長がそれぞれ熱を込めて、巻頭言に説いてきた通りである。すなわち、専門職大学院である法科大学院の任務は、学生が、既存の法規範、既存の法解釈論、既存の実務に習熟し、具体的な問いにつき一義的に答えを導き出せるようにすることに尽きない。法科大学院は、既存の知見では十分な解決が得られない問題を的確に認識し、基本的な考え方に遡り、歴史的・国際的な比較による批判的視点を交えて、既存の法規範・法解釈論・実務を反省し、さらに、新たに生じる可能性がある問題を展望しながら、新たな知見を創出していく場でなければならない。法科大学院は依然として、こうした理念を実現することが難しい状況に立たされており、東京大学法科大学院に固有の困難もある。そのような状況下で、東京大学が、法科大学院の理念を最も鮮明に体现する成果として、ローレビューの公刊を脈々と続けていることの意義は、大きいと言わなければならない。

第17巻となる本ローレビューも、多くの方々の力により成り立っている。今回は学生諸氏から12編の論文が投稿されたが、このような多数の論文の執筆・投稿により、法科大学院の上記の理念が実現され、また、ローレビューの質が高められることになる。厳しい審査を経て本誌に掲載された3編の論文を執筆した学生諸氏には、卓抜を讃えたい。教員からも3編の投稿をいただき、ローレビューに深みが与えられた。そして、編集委員の学生諸氏には、投稿論文の全体構想から一言一句に至るまで、緻密な調査に基づき審査検討をしていただいた。その際には、専門分野の教員から貴重なご意見をお寄せいただいている。折しも、学生諸氏が投稿論文を執筆されたのは、新型コロナウイルス感染症のために諸種の活動制限が課された時期に当たり、他の関係諸氏に尽力いただいたのも、活動制限が緩和されてきたとはいえ、依然としてコミュニケーションに制約の残る時期であった。こうした困難にもかかわらず、充実したローレビューが完成したことについて、関係された全ての方々に感謝申し上げる。

末尾になるが、ローレビューの刊行を支えてくださった方をさらに挙げさせていただきたい。本ローレビューの前巻までの刊行については、法科大学院制度の創設のために大きな役割を果たされた弁護士柳田幸男先生のご支援を賜った（当時の井上正仁研究科長による「第4巻の刊行にあたって」最終段落を参照）。本巻の刊行からは、本法科大学院を2008年に修了された弁護士の渡部友一郎先生より、ご支援をいただけることとなった。渡部先生は、本法科大学院修了後も、本法科大学院の教育を思い準備を積み重ね、本ローレビューの刊行の意義を洞察されて、ご支援をお申し出いただいた。このように修了生のお力により、教育の理念が受け継がれることは、本法科大学院が理想とする姿である。柳田先生、渡部先生に、心よりお礼申し上げたい。

2022年11月

東京大学大学院法学政治学研究科長
山 本 隆 司

東京大学法科大学院ローレビュー第17巻には、投稿締切日である2022年3月18日までに、12編の学生論稿の投稿がありました。これらの論稿の中から、第17期編集委員会は、掲載論稿として3編を選出いたしました。

たくさんのご投稿をいただき、誠にありがとうございました。

第17期編集委員会